

## 沖縄におけるハーリー研究序説II

瀬戸口照夫

### まえがき

本稿は、鹿児島県立短期大学地域研究所発行の「研究年報 第五号」(1976年)に発表した「沖縄におけるハーリー研究序説I」(以下「序説I」と略)の続編である。

主として、1943年に出版された *Folklore Studies* の第二巻に収められている“The Dragon Boat Race in Wu-ling Hunan”の抄訳が中心である。ここで、「序説I」の要点をまとめることによって、本稿の理解を容易にするものとする。さらに、「あとがき」でW. Eberhart 著 *The dragon boat festival* (Chinese Festival: Chapter II 1952年)を若干要約してみたい。

「ドラゴンボートレース」(Dragon Boat Race) は、「龍船競渡」あるいは「競渡」といわれ、今日的スポーツとしての「競漕」の古風で民俗・民族色豊かな身体運動である。したがって、スポーツとしての「競漕」の原型を辿る素材として、それは注目に値するのである。特に、競渡を競渡たらしめる諸々の慣習や儀式や考え方が興味深い。

湖南の武陵で実施されていた競渡の目的は、屈原探搜の伝説的説明と悪魔や悪霊を払う儀式であるという解釈がなされている。前者の説明に関しては、Eberhart が否定的な解釈をしているので、「あとがき」で述べるが、後者の解釈に関しては、Chao Wei-pang がその論拠を示している。(「序説I」29頁～30頁参照)

開催日は、古い慣習では4月8日に造船され、5月1日に進水し、5月10日と15日に競漕が行なわれ、18日が「送標」(「序説I」29頁～30頁参照)であった。しかし、必ずしも期日は、古い慣習に従って一定しているわけではなく、5月17日か18日に造船し、27日か28日に「送標」を行うように変動してきている。

龍船は、もみ材を使用した構造船であり、標準的な艇身は95尺(約29m)で、最も長い船で115尺、短い船で75尺である。乗組員は、船の大きさによって異なるが、おおよそ40人から80人が乗船する。この他に指揮官の役割を担っている頭(headman) 船尾には梢(endman)、旗振り、太鼓打ち、舟舷打ちが乗船する。彼等は、必ずしも乗船しているわけではなく、全くいない場合もある。

競漕は、沅水の北岸から南岸までの約10里の距離間で行なわれる。この距離を横断する途中で、さまざまな術策をもちいて、相手に勝つことを試みるのである。これは、単に漕ぐことが他の人々より優れているということだけを明確にするものではなく、負者となることが、漕手やその地域に悪影響を及ぼすという観念の結果であろう。